

はしがき

皆さんは、未来の事柄を表現するとき、助動詞の **will** と **be going to** を使い分けていますか。もちろん両者は、(1) のようにどちらも可能な場合もありますが、(2) では、**will** は使えず、**be going to** が使われます (* は、それが付された表現が不適格であることを示します)。一方 (3) では、**will** が使われ、**be going to** は使われません。

- (1) {**It will / It's going to**} warm up this weekend.
- (2) Look at those black clouds! {***It will / It's going to**} rain soon.
- (3) Speaker A: Would you like some coffee or tea?
Speaker B: {**I'll / *I'm going to**} have coffee, please.

Will と **be going to** の違いは何でしょうか。そしてその違いはどこから来るのでしょうか。

次に、私たちは日本語で人に何かを依頼するとき、自分と相手との立場や頼み事の内容に応じて様々な表現を用いますが、英語でそうするとき、皆さんは次の4つの表現を使い分けていますか。

- (4) {**Will / Would / Can / Could**} you pass me the salt, please?

Will, **would**, **can**, **could** でどれが一番丁寧な表現なのでしょうか。母語話者はこれら4つの助動詞をどのように使い分けているのでしょうか。

本書は、このような英語の助動詞に関する疑問を取り上げ、そ

の謎を解き明かします。皆さんはきっと、様々な助動詞表現の背後に整然とした規則があることを理解され、一見分かりにくいと思えた助動詞が、魅力的なものとして感じられるようになると思います。

本書は8章からなります。第1章と第3章では、今述べた2つの疑問をそれぞれ考察します。第1章では、will と be going to の違いに加え、未来の事柄を表現するのに、動詞の進行形や単純現在形が用いられるのはどのような場合かを示します。第3章では、依頼の様々な状況や文脈を設定して、4つの表現のどれが用いられ、丁寧さにはどのような違いがあるかを明らかにします。第2章では、特に Will you ...? という表現を取り上げます。Swan (1995) や『ジーニアス英和辞典』第5版 (2014)、『ウィズダム英和辞典』第4版 (2019) では、この表現は指示・命令表現だとされていますが、その用法だけでなく、依頼表現でもあることを多くの状況や文脈を提示して明らかにしたいと思います。

第4章では、「以前よく…したものだ」という意味で、過去の習慣的な動作・出来事を表わす、次のような文の助動詞 used to と would について考察します。

- (5) I {**used to** / **would**} read detective stories when I was in college, but only when I had more spare time than usual.

(5) では、used to と would のどちらを用いても適格ですが、両者にはどのような違いがあるのでしょうか。安藤 (2005)、Swan (1995, 2016) は、(i) 過去の状態を表わすことができるのは、used to のみで、would はできない、(ii) used to は物主語とも共起できるが、would は人主語としか共起しない、というような違いを指摘しています。これらは本当でしょうか。第4章ではこの

ような説明を検討し、両者の違いを明らかにします。

第5章では、can, may, must の不思議な現象を取り上げます。Can には、主語の能力（～できる）や許可（～してもよい）を表わす意味だけでなく、ある事象の可能性を話し手が推量する「可能性・推量」の意味もあります。そしてこの意味は may によっても表わされます。しかし、次に示すように、両者は肯定文と疑問文で、その適格性が逆転します。

- (6) a. His story {***can** / **may**} be true.
 b. {**Can** / ***May**} his story be true?

また、「～に違いない」という意味の must も、may と同様に、肯定文では適格なのに、その疑問文は不適格になります。

- (7) a. His story **must** be true.
 b. ***Must** his story be true?

一体、これはなぜでしょうか。3つの助動詞の肯定文と疑問文での違いの理由を考察します。

第6章では、could が「～することができた」という意味の場合、次のような不適格な文と適格な文が生じる原因を探ります。

- (8) a. ***I could** catch the last train yesterday.
 b. I **could** see the full moon last night.
 (9) a. ***I ran fast, and could** catch the bus. (Leech 2004: 98)
 b. I ran fast, and **could** catch the bus and not be late for work.

私たちは『謎解きの英文法 時の表現』（2013）の第9章でこの

問題の一部を考察しましたが、この第6章でより広範なデータを観察し、先の考察を深めたいと思います。

第7章では、be 動詞は本動詞か、助動詞かについて議論します。こんなことを言うと、何を馬鹿なことを言うのかと思う方もいらっしゃるでしょう。You **are** a college student. で、are は本動詞でしかなく、さらに be 動詞 という名前が示すように、助動詞なんかではないと考える人が多いでしょう。でも、この文を疑問文にすると、**Are you** a college student? となり、助動詞の疑問文 **Will you** come to the party tonight? などと同じように、Are が主語の前に来ます。本章ではこのような不思議の裏に be 動詞の興味深い特性があることを示します。

最後に補章として、himself のような再帰代名詞がどのような意味的制約のもとに用いられるかを、him のような代名詞と比較しながら明らかにします。そして、たとえば **John** hid the book behind {**himself** / **him**}. のように、両者がともに John を指す解釈で適格な場合に、どのような意味の違いがあるかを示します。

本書ではさらに6つのコラムを設けました。コラム①では、ファーストネームとその短縮形（愛称）を取り上げます。Robert が Bob と、Ann が Annie と呼ばれたりするのはなぜかを、友人たちの名前を紹介しながら解説します。コラム②、③は、著者の一人が1960年に渡米したきっかけと渡米後の研究の一端を紹介します。コラム④では、日本語に直訳すると不自然な What brings you here today? のような、無生物主語構文を取り上げます。コラム⑤では、ボストンの大学教授三人の現役引退後についてお話しします。コラム⑥では、再帰代名詞の方が、それが指し示す名詞句（上の例では himself と John）よりも文中で先に現われる場合を取り上げ、そのような文がなぜ適格となるのかを探ります。

この本を書くにあたり、多くの方々にお世話になりました。特

に Karen Courtenay, Nan Decker のお二人からは、本書で取り上げた英語表現に関して有益な指摘をたくさんいただきました。また、学習院大学の真野泰先生には、第2章と第3章で扱った依頼表現について有益なご指摘をいただきました。さらに、くろしお出版の岡野秀夫氏と荻原典子氏には、本書の原稿や校正刷りを何度も通読していただき、多くの有益な助言をいただきました。ここに記して感謝します。

『謎解きの英文法』は、2004年に「冠詞と名詞」でスタートしました。その後、「文の意味」、「否定」、「単数か複数か」と続き、「省略と倒置」、「時の表現」、「使役」を取り上げ、「副詞と数量詞」、「動詞」、「形容詞」を経て、本書の「助動詞」に至りました。この間、18年になりますが、これでかなりのトピックを扱うことができたと思えますので、このシリーズはこれで「完」とさせていただきます。長きにわたりご愛読いただいて、ありがとうございました。

2021 年 秋

著 者

目 次

はしがき i

第1章

未来事象を表わす4つの表現

—特に、will と be going to の違いはどこから来るか?— 1

- 未来事象を表わす will と be going to 1
- Will と be going to の意味の違い 2
- なぜ(3)や(8)の違いがあるのか? 6
- 未来事象を表わす動詞の進行形 10
- 未来事象を表わす動詞の現在形 11
- 近接性 12
- 結び 15

コラム① ファーストネームとその短縮形(愛称) 18

第2章

Will you ...? は指示・命令表現か? 29

- 指示・命令文と依頼文 29
- Will you ...? は指示・命令表現か? 32
- 『ウィズダム英和辞典』と『ジーニアス英和辞典』の
Will you ...? に関する記述の推移 37
- Will you ...? が使えない場合 41
- Will you ...? 依頼文はどんなときに使われるか? 45
- Will you ...? 依頼文は命令文に一番近い 47
- 結び 49

第3章

Can you ...? は Would you ...? より丁寧な依頼表現か? 51

- 4つの依頼表現 51
- {Will / Would} you ...? と
{Can / Could} you ...? の意味の違い 54
- プロポーズの際、
なぜ Will you marry me? と言うのか? 58
- {Would / Will} you ...?
が用いられないのはどんなとき? 60
- Can you ...? は Would you ...? より丁寧か? 63
- 結び 69

コラム② 渡米前 —偶然が生んだ2つの出来事— 72

コラム③ 渡米後 —言語自動処理システム— 74

第4章

Used to と would はどこが違うのか? 79

- Used to と would 79
- これまでの間違った説明(1) 80
- これまでの間違った説明(1)の問題点とその解決 82
- Would が過去の繰り返された状態を表わすさらなる例 88
- Would と過去時を示す要素 90
- Used to は過去の繰り返された状態も表わすか? 92
- これまでの間違った説明(2)とその問題点 94
- これまでの間違った説明(3)とその問題点 96
- 結び 98

第5章

Can, may, must の不思議

—肯定文と疑問文での不適格性— 101

- Can, may, must の不思議 101
- 理論的・一般的可能性と現実的・個別的可能性 104
- Could と might は? 109
- May は疑問文で用いられない 114
- May はなぜ疑問文で用いられないのか? 116
- Must (…に違いない) が疑問文に用いられないのはなぜ? 121
- 結び 122

コラム④ 無生物主語構文 125

第6章

*I could catch the bus yesterday. は不適格、
I could see the moon last night. は適格なのは
なぜか? 135

- 助動詞 could と「～することができた」: 4つの不思議 135
- Could と couldn't が表わす意味 139
- 第1の疑問: could と couldn't の違いは含意の有無 140
- 第2の疑問: 知覚や認識を表わす状態動詞 142
- I **could see** the moon. と
I **saw** the moon. はどこが違う? 144
- 第4の疑問(1): 「不可能状態」と「可能状態」の対照 146
- 第4の疑問(2): 含意が生じる別の場合 149
- 結び 154

第7章

Be 動詞は本動詞か、助動詞か? 157

- Be 動詞は名前の通り動詞(本動詞)で、助動詞ではない? 157
- 縮約が可能かどうか? 157
- Be 動詞の場合は? 159
- Be 動詞の移動 161
- 一般動詞文の Aux には何がある? 163
- (10a, b), (11a, b) の並行性は? 165
- 結び 165

コラム⑤ ボストンの大学教授三人の引退後 167

補章

John hid the book behind himself. と
John hid the book behind him. は
どこが違うのか? 171

- 再帰代名詞と代名詞のどちらを使う? 171
- 再帰代名詞と代名詞で何が違う? 174
- 再帰代名詞と代名詞の両方が可能な場合は何が違う? 177
- 結び 180

コラム⑥ 絵画名詞句内の再帰代名詞 182

付記・参考文献 190

[文頭に付されたマークが表わす意味]

- * 不適格文
- ?? かなり不自然な文
- ? やや不自然な文
- √ 無印と同様に適格文

未来事象を表わす 4つの表現

第1章

— 特に、will と be going to の 違いはどこから来るか? —

● 未来事象を表わす will と be going to

英語を学び始めた頃、まず、未来の事柄を表わすには will を用いると教わりました。そのあと、be going to も未来の事柄を表わすのに用いると教えられて、両者の使い分けがよく分からなかったことを今もよく覚えています。皆さんはいかがでしょう。Be going to は will に比べ、一般にくだけた話し言葉で用いられるという、文体の違いはありますが、それを別にすれば、次の両者の文はすべて適格であり、will と be going to のどちらを用いても未来の事柄を表わすことができます。

[単純未来]

- (1) a. It **will** warm up again this weekend.
- b. It's **going to** warm up again this weekend.

[意志未来]

- (2) a. I **will** drive her back to Arlington late Saturday afternoon.
- b. I **am going to** drive her back to Arlington late Saturday afternoon.

(1a, b) は、その文の内容が未来に起こるであろうと話し手が予測する単純未来の用法です。一方 (2a, b) は、その文の内容が話し手や主語の意志に基づいて行なわれる意志未来の用法です。この点は、(1a, b) の主語が無生物で、話し手が天気について予測

Will you ...? は 指示・命令表現か？

第2章

● 指示・命令文と依頼文

親は自分の子供に指示や命令、助言等を与える際、たとえば次のような文を頻繁に用います。

(1) [指示・命令文]

- a. Eat your carrots!
- b. Mike, clean up your room, please.
- c. Sarah, set the table, will you?
「サラ、テーブルの準備をして。」
- d. Turn off your computer, will you please?

(1a-d) は構文上、命令文ですが、その命令文の口調を柔らげるために、文末に (1b) では please, (1c) では will you?, (1d) では will you please? が添えられています。いずれも親が子供に指示や命令をしているので、意味上、(1a-d) は指示・命令文（あるいは指示・命令表現）と呼ぶことができます。そして、親と子の関係、立場を考えれば、親が子供に「～しなさい/～して」という指示・命令文を用いるのはまったく自然なことと思われます。

しかし、私たちがたとえば友人や近所の人、見知らぬ人に何かをして欲しい場合、指示・命令文はあまりに直接的で、高圧的です。人間関係を円滑に維持するためには、もっと間接的で柔らかな依頼文が用いられます（【付記1】参照）。そして依頼文には、

Can you ...? は Would you ...? より 丁寧な依頼表現か？

第3章

● 4つの依頼表現

家族や友人と食事の際に、たとえば塩を取って欲しいとき、次の4つの表現はどれでも用いることができます。

- (1) a. **Will you** pass me the salt, please?
b. **Would you** pass me the salt, please?
- (2) a. **Can you** pass me the salt, please?
b. **Could you** pass me the salt, please?

ただ、これら4つの表現にはどのような違いがあるのでしょうか。おそらく皆さんは、丁寧さの違いだと思われるでしょう。この点に関して『ジーニアス英和辞典』第5版(2014)は、couldとwouldの語法欄でそれぞれ次のように述べています(p. 484, p. 2431)。

- (3) [丁寧さの度合い] Could you ...? を類似表現の Can you ...?, Would you ...?, Will you ...? と比べると、丁寧さの度合いはおおよそ
Could you ...? > Can you ...? > Would you ...? > Will you ...?
の順に低くなる。
- (4) Would you ...? は Will you ...? よりも丁寧だが、Can [Could] you ...? ほど丁寧ではない。

Used to と would は どこが違うのか？

第4章

● Used to と would

英語では、「以前よく…したものだ」という意味で、過去の習慣的な動作・出来事を表わすのに、助動詞の **used to** と **would** の両方が用いられることは、よくご存知でしょう（【付記1】参照）。次の例を見てみましょう。

- (1) a. I {**used to** / **would**} read detective stories when I was in college, but only when I had more spare time than usual.
b. My father {**used to** / **would**} play tennis with my mother when they were young.

(1a, b) では、**used to** と **would** のどちらを用いても適格です。

Used to と **would** は、もちろん話し言葉だけでなく、次のように書き言葉でも用いられます。(2a, b) はともに、Roald Dahl (1975) の *Danny the Champion of the World* (Puffin Books) という小説からの引用です。

- (2) a. But he was a marvelous storyteller. He **used to** make up a bed time story for me every single night, and the best ones were turned into serials and went on for many nights running. (p. 9)

「しかし父さんは物語の名人でした。毎晩、僕の寝る

Can, may, must の 不思議

— 肯定文と疑問文での 不適格性 —

第5章

● Can, may, must の不思議

助動詞の can には、主語の能力 (ability) (「～できる」) や許可 (permission) (「～してもよい」) を表わす意味だけでなく、ある事象の可能性を話し手が推量する「可能性・推量」(possibility) の意味もあることはよく知られています (【付記1】参照)。そして、この可能性・推量の意味は、助動詞の may や might, could によっても表わされます。これら4つの助動詞が用いられた次の例文を見てみましょう (可能性・推量の意味を表わす (1a-d) の助動詞は、通例、強勢 (ストレス) が置かれます)。

- (1) a. **Can** his story be true? 「彼の話は本当なのだろうか。」
 b. His story **may** be true.
 c. His story **could** be true.
 d. His story **might** be true.

「(1b-d)：彼の話は本当かもしれない。」

(1a) は疑問文で、can が可能性・推量の意味で疑問文に用いられる場合、英和辞典ではその日本語訳として、「…でありうるだろうか/ いったい…だろうか」などが与えられています。一方、(1b-d) は肯定文で、may, could, might の意味は、「(ひょっとして) …かもしれない」です (『ジーニアス英和辞典』第5版 (2014)、『ウィズダム英和辞典』第3版 (2013) 等参照)。

*I could catch the bus yesterday. は不適格、
I could see the moon last night. は適格なのはなぜか？

第6章

● 助動詞 could と「～することができた」：4つの不思議

高校生や大学生の英作文で、助動詞の could が、「～することができた」という意味で用いられている次のような英文をよく目にします。

- (1) a. *I **could** catch the last train yesterday.
- b. *I **could** enjoy the movie last Sunday.
- c. *I **could** pass the entrance exam of this university.

しかし、Leech (2004: 98), Swan (2005: 98) 等、多くの文献で指摘されているように、過去の一回限りの出来事を表わす (1a-c) のような文は、多くの母語話者にとっては不適格で、次のような表現が用いられます (【付記1】参照)。

- (2) a. I {**caught / was able to catch**} the last train yesterday.
- b. I {**enjoyed / managed to enjoy**} the movie last Sunday.
- c. I {**passed / succeeded in passing**} the entrance exam of this university.

ただ、興味深いことに、(1a-c) の could を否定形の couldn't (could not) にすると、「～することができなかった」という意味

Be 動詞は本動詞か、助動詞か？

第7章

● Be 動詞は名前の通り動詞（本動詞）で、助動詞ではない？

本章のタイトルを見て、「えっ？」と思われる人が多いと思います。なぜなら、多くの人が、be 動詞は、一般動詞とは異なる振る舞いをするものの、名前が示す通り、動詞（本動詞）であると学んでこられたと思うからです。be 動詞は助動詞ではないというのは、本当でしょうか。以下で明らかにしたいと思います。

● 縮約が可能かどうか？

次の (1a) の have は、(1b) に示すように、主語と一緒にあって縮約が可能ですが、(2a) の have は、(2b) に示すように縮約できません。

- (1) a. I **have** finished my homework.
b. I've finished my homework.
- (2) a. I **have** three brothers.
b. *I've three brothers.

これはなぜでしょうか。もうお気づきだと思います。(1a) の have は、本動詞の finished と一緒にあって完了を表わす助動詞ですが、(2a) の have は、「持っている、…がいる」という意味の

John hid the book behind himself. と John hid the book behind him. は どこが違うのか?

補章

● 再帰代名詞と代名詞のどっちを使う？

皆さんは、himself, herself のような再帰代名詞 (reflexive pronouns) の次のような用法には馴染みが深いでしょう。(1a-d) では、再帰代名詞 himself, herself が、動詞の直接目的語、前置詞の目的語や動詞の間接目的語の位置に現われて、主語 John, That child, Mary をその「先行詞」(antecedents) としています(つまり、両者(以下、太字で示します)は同一人物を指します)(【付記1、2】参照)。

- (1) a. **John** criticized **himself**.
- b. **That child** often talks to **himself**.
- c. **John** talked to Mary about **himself**.
- d. **Mary** gave **herself** a prize.

(1a-d) でもし、再帰代名詞を代名詞に替えると、その代名詞は、主語を先行詞とすることができず、主語とは異なる別の人(たとえば、先行文脈で話題となっている人)を指すことになります。次の例に*が付してあるのは、主語と代名詞が同一人物を指し得ず、同一指示の解釈では不適格であることを示すためです。

- (2) a. ***John** criticized **him**.